

# リョーマン日記

ウルシ



## 漆掻き道具



厚い樹皮を削り傷をつけやすくなる。  
傷をつけやすくなる。



ウルシや日陰に弱いウルシは、人間が下草などを刈って育てる必要がある。  
種子を集めても発芽させ、苗木も作っている。

漆塗きは、6~11月に行われる。

一人の職人が一年間に塗くウルシは  
これを4グループに分けて、  
一日1グループずつ作業を進める。

300~  
400本

### 漆塗き職人(塗き子)

高齢化が進むが、  
国産漆の復興に  
ともない若い女性も!

### ① 下準備

下草を刈って、風通しと  
日当たりを良くする。

傷つける木に  
激励の  
念を送る  
たのんだよ

### ② 目立て(辺付け) (6月中旬)

傷をつけていく箇所に  
じぶんじをつける

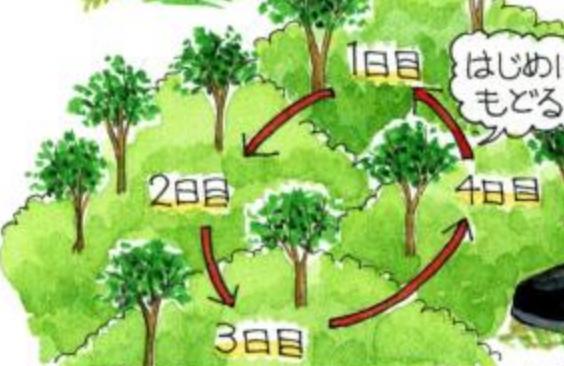
約40cm

これで採取できる  
漆の量が決まる  
重要な仕事。

目立てでつけた  
傷の上に、前より  
少し長い傷を  
4日サイクルで  
つけていく。

前回つけた傷を  
治すため集まつた  
樹液(漆)が  
しみ出してくれる  
のを集める。  
**「辺漆」**

でも、ウルシは  
根萌芽力が強いから  
翌春には根から新し  
い芽を出して、  
手入れをすれば  
10年位で次の漆がとれるよ。



### 漆塗き職人(塗き子)

高齢化が進むが、  
国産漆の復興に  
ともない若い女性も!

目立てでつけた  
傷の上に、前より  
少し長い傷を  
4日サイクルで  
つけていく。

前回つけた傷を  
治すため集まつた  
樹液(漆)が  
しみ出してくれる  
のを集める。  
**「辺漆」**

20回以上  
繰り返す  
← 21日目  
← 17日目  
← 13日目  
← 9日目  
← 5日目  
← 1日目(目立て)

### ④ 裏目塗き (9月下旬~10月下旬)

辺塗きよりも  
長い、水平の塗傷  
をつけて  
漆をとる。

**「裏目漆」**

幹を一周する  
傷をつけて  
とどめをさす

**「止漆」**

### ⑤ 止塗 (10月下旬~11月中旬)

木の状態  
を見極めて  
傷をつけ、  
わざかにしみ出た漆を  
一滴ずつ塗き集める。



こうして、  
漆を出しつづけた木は、冬の前に伐採される。

5ヶ月かけて  
一本の木から  
とれる漆は、  
たった200mlなんだ

ものすごく  
貴重なんだね

でも、ウルシは  
根萌芽力が強いから  
翌春には根から新し  
い芽を出して、  
手入れをすれば  
10年位で次の漆がとれるよ。

漆の出方は、季節や天気、木毎に変化する。  
それを見極めて、無駄なく採るのは職人技だ。

# 漆の精製

大切に集められた漆は、  
使用目的に合わせて  
加工されるよ。



採集されたばかりの漆（荒味漆）から「ゴミを除いたもの

生漆のままでも下地用として使えるけど攪拌して全体をなめらかにするんだ。ナヤシ」という作業だよ。



精製時間と  
見極める職人



ガラス板に付けて肉持ちや透明感などを確認する。

黒漆は「クロメ」の途中で鉄粉を入れて作るんだ

透漆に顔料を入れ・練り込んで様々な色漆ができる



こうして精製された漆は光の屈折率が高いので、深みのある光沢をもつ。



縄文時代の土器

だから何千年前の器が残っていいるんだね！

耐熱・耐温・抗菌作用も強く、室内ではパワフルな保護材なんだ。



たぐいに漆は一度乾くと酸やアルカリにとても強い。



表面張力が大きいから、天然塗料の中では最も平滑に広げられるんだよ。

# 漆の文化

日本人はこうした漆の特性を生かして豊かな文化を育んできた。

国宝  
中尊寺金色堂



塗られて  
いるんだ



国宝 鹿苑寺(金閣)

上塗り直後は、鏡のように模様を写す。



彩色部分の下地にも漆が



見て  
いる  
からね。  
次神  
様と  
自分と  
見てい  
る代  
の職  
人が



国宝  
阿修羅像

国宝  
八橋蒔絵硯箱



国宝 日光東照宮の修復

1636年に造営されて以来、数十年に一度の漆塗を繰り返すことによって土台の木を守ってきた。

何重もの塗層を見ると  
先人達の技と思ひが  
伝わります。



江戸～昭和の修理で重ねられた

漆膜の上に新たに漆を重ねていく。

次の修復まで  
保たせます。

傷みがはげしい部分は、  
漆を剥がして  
塗膜を進める。



欠けた部分も 漆で接着!

何よりすごいのは、漆は剥がして修理・復元ができるということだ。

## 漆を身近に

安価な外国産の漆により、衰退してきた国産漆。しかし、平成30年から、国宝や文化財の修復には原則100%・国産漆を使用することが決定した。



漆産業は、守るべき伝統産業ではなく、攻めるべき産業に大転換しつつある。

数十年先の修復に向けて、若手の塗師を育てなければ！

もとウルシを植えないといけないよ。

生き子の数も増やさなきゃ

弟子入りします！



木地師が加工した木の器(トチノキやケヤキ等)に…



塗師が漆を塗って研いで何度も繰り返し。

漆だけで厚みを作っていく。  
数ヶ月作業。

漆器は木や紙に漆を塗り重ねて作る。

お椀！



そして漆は、国宝だけのものじゃない。

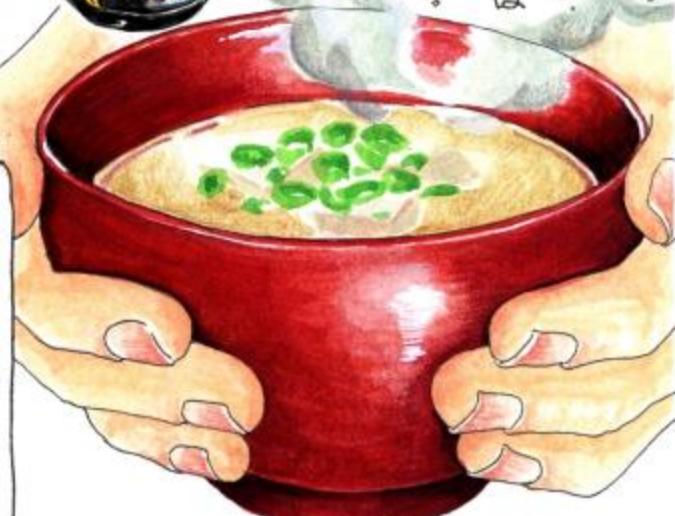
手触り、口当たりがふくらややしく、熱々の湯を入れても、手に伝わるのはやわらかなぬくもり。

漆器は五感で感じる器。



時絵師により、装飾されるものも…

漆器は使い続けると、キメが整えられ、色ツヤが増していくよ。



自分の器を育てよう。

「つや」と命名！

みどり